

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第四十二回）

とよくに か わら

## 「豊国・香春の萬葉集」

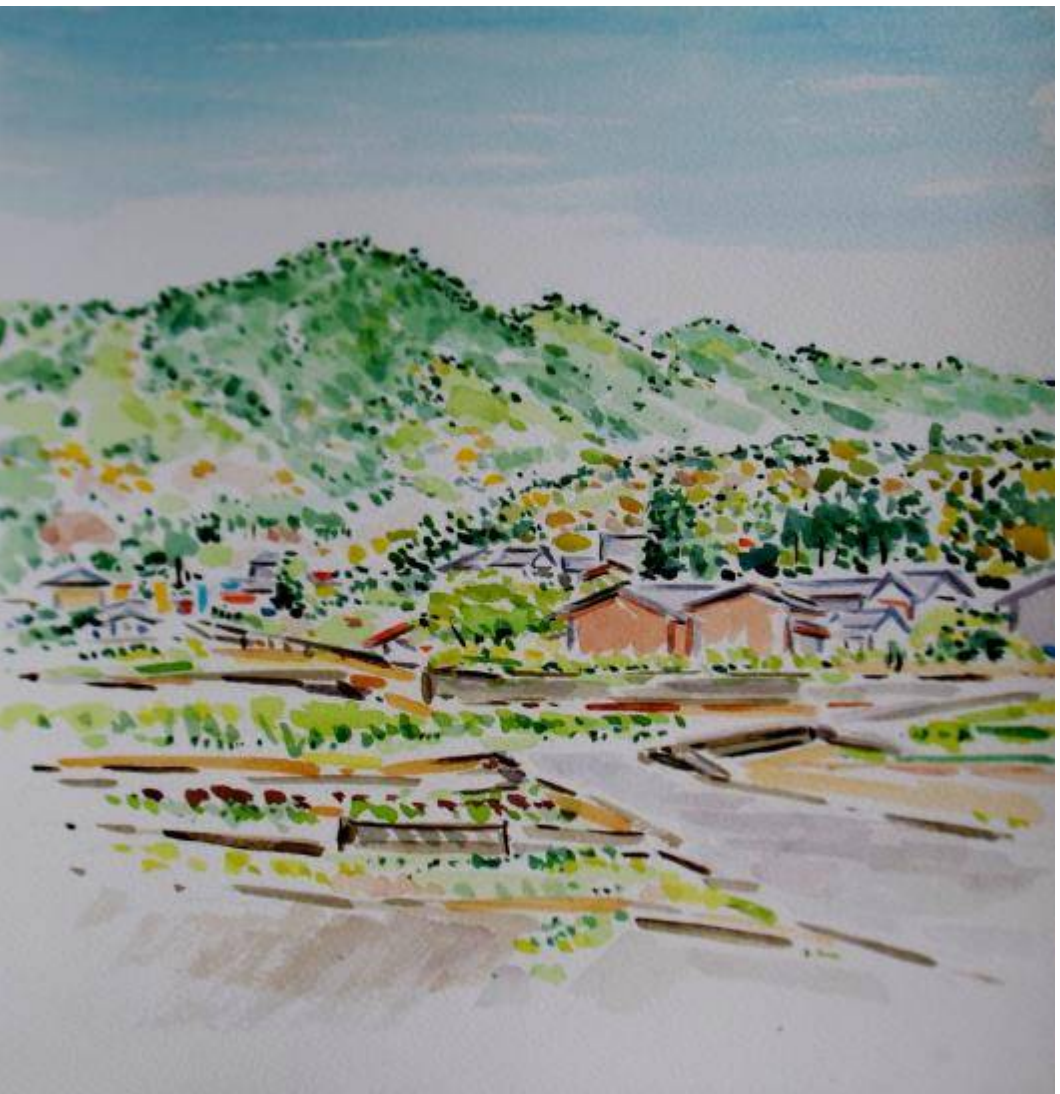
・萬葉集に詠われている豊国の「香春」は今の福岡県の東北部に位置する福岡県田川郡香春を指す。「香春」には福岡県中部に位置し古代九州地区を統治していた大宰府と豊前国府（福岡県京都郡みやこ町辺り）などを結ぶ官道「田河道」が本シリーズ第三十一回に掲載した万葉集にも詠われる鏡山（頂に鏡山神社鎮座）の麓を通っていたとされる。今、この鏡山の麓に古代大宰府道「田河道」の石碑が建つ。



・古代の官道「田河道」は、大宰府からは、北東部にあたる米ノ山峠（飯塚市）などを越えて「香春」に到り、街中を通り香春と京筑地方（福岡県東部に位置し周防灘に面する行橋市と豊前市、京都郡、築上郡をいう。）を結ぶ、古代、仲哀天皇が通ったという故事から名付けられたという仲哀峠（七曲峠）、今は新仲哀トンネル（国道201号線）を通り、豊前国府（福岡県京都郡みやこ町辺り）に至るか、更に進み大宰

府から東へ50キロ程離れた瀬戸内海の南西端に位置する周防灘沿岸にあった古代、  
草野津（現・行橋市辺り）と呼ばれる港などに至る官道であった。

（写生地）万葉集に詠われる「香春の鏡山」はJR日田彦山線「香春駅」から北方約  
2キロの山あいの平地の田のあいだにある、こんもりと茂った小山である。この鏡山  
の麓から東の方向にあった豊前国府（現福岡県京都郡みやこ町辺り）あるいは周防灘  
沿岸に向かう古代の雰囲気が残る道路と周辺の香春風景、背景に香春町と京筑地方と  
を隔てる山々（障子ヶ岳・飯岳山⇨大阪山など）を描く（杏花）



○香春の町は筑豊（福岡県中央・内陸部）を代表する名山といわれる香春三山（南  
から北に一の岳、二の岳、三の岳と称す）の一の岳の麓にあり町の中には古代の官  
道・田河道の「田河駅家」が置かれ、また、北に向う小倉街道（現・国道32

2号線）と東に向かう行橋街道（現・国道201号線）の分岐点に当ることから多くの人が行き来し交流する中で香春を舞台にした歌が数首、万葉集に記されている。

・その中の一つに次の歌が万葉集に掲載されている。

「抜気大首、筑紫に任まけられし時に、豊前の国の娘子紐を見とめを娶めとつて作つつた歌三首」

ぬきけのおおびと  
とよくに

わぎへ

つが

1) 豊国の 香春は我家 紐見に い繫り

む

居れば 香春は我家

卷九—1767

〔解説〕豊前の国の香春はわが家である。愛する紐見にいつもつながっているから、香春はわが家である。

\*「い繫り」とは「糸でからげつづる。つながる。」との意

いそのかみ

ふる

わさだ

2) 石上 布留の早稲田の 穂には出で

ず心のうちに 恋ふるこの頃

卷九—1768

〔解説〕石上の布留の早稲の田のように、あなたへの思いは顔色にあらわさずに、心のうちで恋しく思っているこの頃である。

\*「穂には出です」は顔にはださず。の意

・「石上の布留」は、奈良県天理市の西方一帯にかけてひろく称した地名で、布留は石上神宮付近に今も布留町の地名が残る。万葉集には、石上神宮一帯を「石神

布留」と詠む人麻呂歌集 卷十一—2417に次の歌がある。

いそのかみ

ふる

かむすぎ

かむ

われ

さら

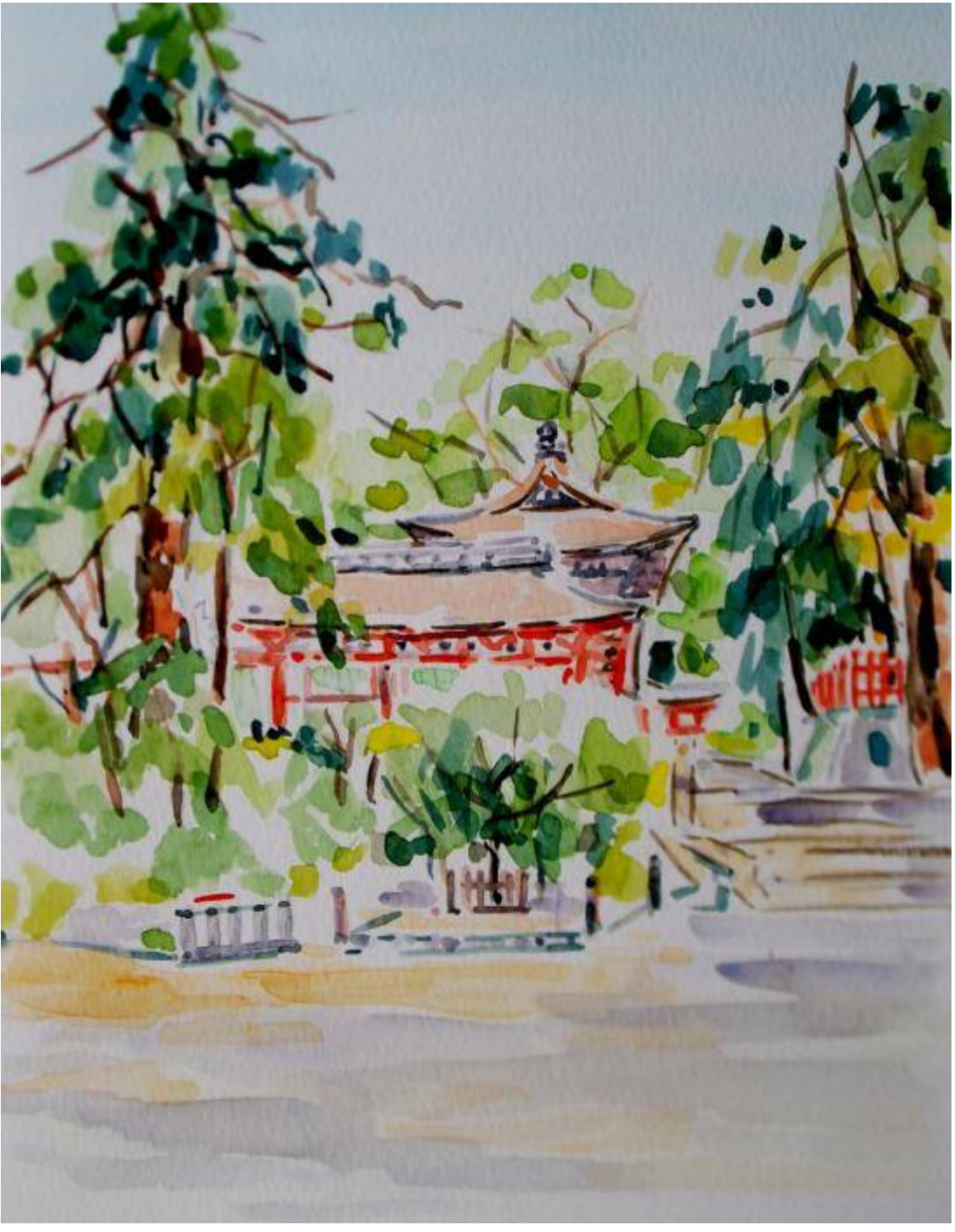
石上 布留の神杉 神さぶる 恋をも我は 更に

するかも

(解説) 石上の布留の神杉のように老いてなお、恋をしている。

・石上神宮は「日本書紀」に記述がある日本最古と云われる神社として有名である。元々は古代、大和朝廷の武器庫にも当たるようなところで、この地の豪族・物部氏が管理していた。

(写生地) 石上神宮境内はあくまでも静寂で古代が眠ってそのまま現在に至った趣があった。布留山を背景に鬱蒼とした神杉の杜に鎮まる石上神宮を描く(杏花)



3) 斯<sup>か</sup>くのみし 恋ひし渡ればたまきはる

命も我は 惜しけくもなし 卷九—1769

(解説) これだけ恋しく思いつづけているのだから、自分はもう命も惜しいことではない。\*「斯くのみし」—これだけの意。\*「惜しけく」—惜しいことの意。

○この歌は、何かの任を帯びて筑紫に下った作者が、豊国香春の里で、この地の「紐児」という娘子をめぐった喜びを詠んだものである。また、2)の「石上の布留」の歌一首から作者の故郷である大和の地に例えて詠った相聞歌ではないか。との説がある。また、中央の官人が地方に赴任している間は、任地の女子をめぐって妻妾にすることは古くはかなりおこなわれたらしい。

(参考文献) 岩波書店発行「日本古典文学大系・万葉集」林田正男著「万葉の歌」等

